令和6年度(2024年度) 学校評価総括表　　【伊丹市立　南小学校】

教育目標	「自ら考え　認め合い　つながる子」 ～みんな　みなみの子～
重点目標	全ての子どもの幸せのため、あらゆる組織的な取り組みで、積極的にいじめゼロ新規不登校ゼロをめざす 特別支援教育の視点を大切にし、すべてのみなみっ子が安心して過ごせる居場所がある学校をめざす

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	①『つながりを「子ども」が実感し、学びを広げられる授業づくり』 ②「勝手に研究授業」「教室フルオープン」の推進 ③学校運営協議会との連携	①日々の授業の中で、「つながり」を意識した授業づくりを実施すると同時に、校内研究授業をおこない、研究テーマの促進を図る。 ②授業を自主的に公開し、互いの授業を参観する場を設ける。 ③九九道場の実施	①児童アンケート「友だちに伝えたり友だちから聞いたりする活動が好きだ」が90%以上、「授業は分かりやすい」が90%以上。 ②・各学年校内研究授業をおこない、毎回事後研にて研修の場を設ける。 ・「勝手に研究授業」を年間10本以上おこなう。 ③児童の参加率が90%以上。	B	①児童アンケートにおいて、「授業は分かりやすい」は前期・後期共に90%を超えたが、「友だちに伝えたり友だちから聞いたりする活動が好きだ」は、前期87%後期84%に留まった。 ②校内研究授業は年間を通して計画的におこなうことができ、事後研では活発な交流の場となった。「勝手に研究授業」は年間11本おこなうことができたが、更に活性化させるための工夫が必要。 ③地域の方が協力してくださり、九九道場を実施することができた。また2年生の先生方が児童に声かけをしてくださり、児童の参加率が90%以上となった。	①「友だちに伝えたり友だちから聞いたりする活動」は引き続きおこなっていくと同時に、その活動から新たな学びへと広げたり、達成感を得られたりすることができるように、教職員がさらに意識して取り組んでいく必要がある。また、様々な研修会を通してそのようなスキルアップができる場を、今年度同様設けていく必要がある。 ②「勝手に研究授業」を活性化させるためには、積極的に啓発するだけでなく、その必要性について教職員全体で交流し、共有していく必要がある。 ③九九が苦手な児童については、本人のやる気を削がないように様子を見ながらできる限りのフォロー（個別に九九を聞く）をやっていく。	・概ね良い取組と成果が得られた。 ・読書について引き続き課題が残る。大人が本を読む習慣を見せるなど、学校、家庭、地域での取組も必要。 ・学校・地域・家庭が一体となって取り組んでいることが肌で感じられた。 ・自己肯定感の低さが継続課題。 ・九九道場の取組は大きな成果を得ている。 ・新1年生への「勉強への興味付け」が入学当初に身につくようなスタートカリキュラムの検討も必要。 ・教員間で学び合いの風土が醸成されている。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①情報活用の力を育む授業づくり ②英語への興味関心を育てる ③タブレットの有効活用とデジタル化推進計画の作成	①・社会、学活、総合などの時間に調べ学習やプレゼンテーションなどタブレットを活用する機会を作る。 ・情報活用能力・情報モラルについて系統立てた学習を取り入れる。 ②児童が英語を積極的に発声できる活動を取り入れる。 ③・タブレットやアプリ、ミライシードなどを活用した授業実践について教員で交流する。 ・部会で各学年のタブレット等の有効だった活用を交流し、学年に広げていく。	①児童・保護者アンケートにて「情報機器（タブレットやスマートフォンなど）の取り扱いについて、家や学校でのルールを守り、安全に使うことができる。」という項目で「できる」という回答が80パーセント以上。 ②単元ごとのふり返り ③職員アンケートにて「わかりやすい授業づくりのために、タブレットやICT機器を使っている。」という項目で「はい」という回答が90パーセント以上。	A	①児童は，どの学年も90%以上が安全に使えているという意識でいるが，保護者との認識に差がある。（それでも概ね80%をこえているが。）保護者の要望の中には，「ルールが守れないのであれば，預かってほしい。」といった意見も見られた。 ②自分の英語の話し方について目を見て話せているか、適切な声の大きさで話せているかなど、具体的に振り返る中で、「積極的に話せた」と振り返る児童が去年度以上に増えてきた。 ③概ね90%近くの教職員がタブレットやICT機器を活用できている。	①情報モラルについての授業を実施し，情報機器を扱う際の利便性とリスクについて，正しい知識を身につけられるようにしていく。 ②十分に話せなかったと感じている児童については、人と比べるのではなく、以前の自分から少しでも進歩していればいいことを引き続き伝え、友達の話し方などからヒントを得られるようにしていく。 ③研修を継続的におこない，どの教職員もタブレットやICT機器が有効活用できるようにしていく。	タブレットを中心としたデジタル教育の発展・整備か進んだ。デジタルとアナログの両方のリテラシーを持ち合わせた次世代の人材育成を期待する。 AIの発達に伴い、情報の精査とその利用法が課題となる。PTAと連携して取り組む必要がある。 ・授業の中でもっと積極的に活用しても良い。 ・英語について、まだまだ「苦手なもの」「（翻訳機があるから）不要」と考えている児童もいる。楽しさや必要性を理解させる工夫が必要。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①「自分に自信を持ち、認め合い、仲間とつながる子」の育成 ②いじめ見逃しゼロ ③全てのみなみっ子が安心して過ごせる居場所がある学校 ④失敗を恐れず、挑戦する心を育てる。	①いいところ見つけやふわふわ言葉を使えるようにする。また、友達との話し合いを充実させる。 ②いじめの早期発見に努め、小さなことも共有する。昨年度同様、3学期にも1，2学期と同じ形式でいじめアンケートを実施する。 ③不登校の兆候の早期発見と共有 ③必要に応じた保護者との面談の実施 ③みなみっこの目標の指導 ④目的を持った体験活動のよりよい実施（自然体験、地域活動、異学年交流なども含め）	①児童アンケート「友達に伝えたり、友達から聞いたりする活動が好き」で90%以上を達成。 ②組織的な対応の徹底と強化 ③児童アンケート「学校へ行くのが楽しい」80%以上。 ③別室経営の充実 ・課題の準備 ・引継ぎ事項の共有 ・人員の確保 ③けがによる保健室来訪者の10%削減（安全部と） ④教職員アンケート「学年に応じた体験的活動や校外学習を実施している。」80%以上。	B	①児童アンケート「友達に伝えたり、友達から聞いたりする活動が好き」と回答した児童は前期87%・後期84%に留まった。「友達の考えを聞いてよかったなと思うことがある」の項目が前期後期ともに90%を超えているのに対して、「自分の考えを伝えてよかったなと思うことがある」の項目では、前期78%・後期68%と低くなっている。 ②生活指導部会を中心として組織的に取り組んだ。 ③学校へ行くのが楽しい80%達成。別室経営については、共有について課題である。 ④教職員アンケート80%以上達成。一方で行き先や内容については、見直しを求める意見もある。	①受け入れ、受け入れられる環境づくりをする。 ②現状の取り組みを進めていくと共に、生活指導での聞き取りや解決への持っていき方などを共有するようにする。 ③別室に来ている子の課題の共有などをする方法を考える。 ④内容等については、反省を元に今後も検討していく。	・いじめ防止標語への取組は、地域・家庭への啓発が進んだ。他人のことを考えて物事に取り組むなど徳育の充実を期待する。 ・不登校対策について、児童の気持ちを尊重しながら丁寧に取り組んでいる。地域を巻き込んだ不登校対策も必要に思う。 ・以前に比べて、誰とでも仲良くできる児童が増えた印象があり、良い傾向である。 ・あいさつへの取組は実を結んでいる。継続して取り組むことを期待する。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	①運動量を保証し、仲間とつながり、楽しみながら、運動の日常化につながる授業づくりと取組推進 ③食育のカリキュラムの推進	①教員の授業支援 ・授業アイデア（サーキット等）の共有・研修 ・用具の購入と整理整頓 ・休み時間の外遊びを推奨 ・みんなでジャンプ等の行事や体育委員企画の実施 ・みなみんピック（通年と冬季）を拡充 ③給食指導と同時に、食育指導を行う。（給食だよりを活用する。） 低学年は給食センターの方と協力して食育指導を行う。	①・児童アンケートの「体育の授業は楽しい」で90%以上を達成。 ・教職員アンケートの19.「体育（保健）指導において、体を動かすことの楽しさや仲間と関わり合うことの楽しさを実感できる授業を実施している。」と、20.「外遊びを励行している」で、90%以上を達成。 ③食育の日々の実践の充実	A	①・児童アンケート、保護者アンケートともに、90%以上を達成することができた。 ・ハードルやミニバレーボールなど用具を購入し、体育館・階段下・外の体育倉庫の整理整頓を実施することができた。 ・みなみんピックやみんなでジャンプ、体育委員会の企画を中心に、休み時間に外遊びを奨励することができた。 ・石灰庫が社会体育と混ざることや、体育館の倉庫の置き場所が社会体育と学校で不明瞭なところがあった。 ③給食センターの方と食育指導を行った。	①管理職を通して、体育用具や倉庫などの、学校と社会体育の使い方や場所について確認し、徹底する。 ③給食便りを活用し、学級指導において高学年における食育指導の回数を増加する。	取組が実を結びつつある。「生活リズム」を整えるなど基本的な生活習慣への取組を引き続き継続されることを期待する。
	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実		①キャリア教育カリキュラムの充実 ②SC・SSWとの連携強化 ③相談しやすい教師集団、体制づくり	①キャリア教育の日常化 ②重点的に連携できる場面をつくる。 ③声かけチェックシートや記録を活用する。	①自分を見つめる力・目標をもって取り組む力の向上 ②SC来校日の木曜日に連携する。SSWの随時来校日に連携する。 ③児童アンケート「悩み不安があれば先生や友だちに相談できる」80%以上。	B	①係活動や、植松社長の講演に関連して将来の夢に向かって頑張ることについて考えることができた。カリキュラムの見直しを行った。 ②児童や保護者の状況に応じて、SCやSSWへ相談できるよう、管理職を通じて連携を図ることは概ねできていた。 ③毎月、児童の状況を部会で報告し合い、必要に応じて、児童の様子を見に行ったり、保護者との面談に同席したりした。	①カリキュラムを充実させたい。 ②必要に応じて、SCやSSWと情報共有を行っているが、放課後の時間が合わない日も多く、定期的に話をする時間が取れていないため、意識して情報共有を図る必要がある。 ③今後も継続して、担任が一人で抱え込まないよう、学年・学団・担当へ相談できるよう、部会でも情報共有を行っていく。	・キャリア教育の充実を期待する。 ・SC，SSWを増員し、もっと不安な子や家庭の悩みを聞いていくことが必要。
	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実		①コンサルテーションの活用 ②みんなみなみの子の実践	①定期的なコンサルテーションの活用を行う。 ②すべての教員が特別支援教育の視点を持ち、学級経営を行う。 ③児童の情報共有を行い、共通理解に努める。	①コンサルテーションを毎学期行う。 ②③特別支援教育の研修を毎学期行う。	B	①定期的に実施はできていないが、新1年生だけでなく、必要に応じてコンサルテーションや巡回相談を実施した。 ②③子どもを見つけて研修会を含め、講師を依頼し研修会を実施した。また、支援を必要とする児童のサポートとして、入り込みを依頼した。	①②③ここ数年、サポートが必要な児童が増え、入り込みを依頼することが増えている。次年度も、特に新1年生は支援が必要な児童がいることが予想される。今後、早い段階で保護者と面談を行うなど、早期対応ができる手立てが必要がある。	支援を必要とする児童が増加する中、指導・支援の工夫、改善を重ねながら今後も継続して取り組まれることを期待する。 ・幼小連携を強化することが必要。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実		①自主研修「MINA-KEN」の推進	①様々なテーマの自主研修会を通して、教員の資質向上を図る。	①定期的に、必要に応じた自主研修会をおこなう。	A	①たくさんのご協力をいただいたおかげで、様々な、そして有意義な研修会をおこなうことができた。	①今後もその時期に応じた内容や、教職員の困り感から研修内容を計画し、進めていく必要がある。	・工夫した授業、学級づくりが素晴らしい。 ・継続した研修は必ず実を結ぶ。
教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築		①学校職員とコミュニティ・スクールの理解と連携強化 ②目標、課題、取組内容の共有	①学校教育目標研修会に参加し、学校職員と意見交流を図る。 ②学校・家庭・地域が目標を共有し、社会総がかりで、児童を育てる体制を構築する。	①学校教育目標の研修会を学校運営協議会と一緒になって開催し、現状・課題・めざす姿の共有が図る。 ②2年：九九道場への参加。 6年：九九ボランティア、園芸ボランティアの実施。 ビオトープの再生計画に着手。 いじめ防止標語	A	①学校教育目標の研修会を学校運営協議会と一緒になって開催し、現状・課題・めざす姿の共有が図れた。 ②2年：九九道場への参加。 6年：九九ボランティア、園芸ボランティアの実施。 ビオトープの再生計画、児童、教員、保護者、地域の方がそれぞれの役割を決めて関わることができた。いじめ防止標語の応募作品数が大幅に増加し、いじめに対する意識が高まった。	①目標達成に向けて、施策や行事をPDCAサイクルの中で、実行していく。 ②ボランティア募集の簡略化・ ビオトープの維持、活用について、具体的な内容を構築していく。 学校・家庭・地域が「みんな　みなみの子」の意識をさらに高め、南小学校に通う全てのみなみっ子の成長を温かく見守る環境を構築していく。	・学校運営協議会を巻き込んだ学校運営をさらに推し進めた点で「地域と共にある学校」に一歩前進したと思われる。 6年生による「地域の方々への感謝の会」は良い取組である。 ・地域ともつながりは、不登校対策に繋がる。 ・ビオトープガイドブックの作成など、今後のビオトープの管理維持体制について、協議が必要。 ・学校と地域のつながりが年々強化されている。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進		①防災訓練・教育の充実 ②危機管理意識の維持・向上 ③交通安全指導の充実 ④安全点検の充実 ⑤意識改革の推進	①定期的に実施する（火災、地震、防犯）。 ②③日々の安全指導の充実 ・登校指導（学期に1回） ・下校指導（週に1回） ・自転車安全教室の実施（3年） ④毎月の点検の毎月実施 ・故障箇所の写真での報告 ⑤来年度、カリキュラムマネジメント検討委員会の設置を検討	①保護者アンケート「家庭で、いざという時の行動の仕方（火事・地震・不審者など）について、話し合っている」80%以上。 ②児童アンケート「くらしのルール（教室の過ごし方・廊下や階段の歩き方など）を守って生活している」80%以上。 ③児童アンケート「登下校のとき、ルール・マナー（道路の端を歩く。さわいだり、ふざけたりしない。など）を守っている。」80%以上。 ④けがによる保健室来訪者の10%削減（生活指導と） 保護者アンケート「学校は、学習・生活の場として、お子さんが活動しやすい環境（施設・設備）が整っている」80%以上。 ⑤来年度、カリキュラムマネジメント検討委員会の設置を検討にて、業務改善も含め、自校の課題に応じた独自のカリキュラムマネジメントを実践していく。	B	①保護者アンケート「家庭で、いざという時の行動の仕方（火事・地震・不審者など）について、話し合っている」81%で達成できた。 ②児童アンケート「くらしのルール（教室の過ごし方・廊下や階段の歩き方など）を守って生活している」88%で達成できた。 ③児童アンケート「登下校のとき、ルール・マナー（道路の端を歩く。さわいだり、ふざけたりしない。など）を守っている。」92%で達成できた。 ④けがによる保健室来訪者は2学期末現在で比較して8．3%減（252人減）で達成できなかった。 保護者アンケート「学校は、学習・生活の場として、お子さんが活動しやすい環境（施設・設備）が整っている」90%で達成できた。 ⑤目的、狙いを明確にしながら、教育効果を上げるためのカリキュラムマネジメント及び業務改善を行っていく必要がある。	①達成はできているが、他の項目に比べて低いと感じるので、来年度は学校や地域などからの啓発をさらに増やしていく必要がある。 ②目標を達成できているので、来年度も引き続き指導を行っていく。 ③目標を達成できているので、来年度も引き続き指導を行っていく。 ④来年度は啓発の掲示物や、休み時間の学級指導なども積極的に行う必要がある。 ⑤カリキュラムマネジメント検討委員会の定期的な開催。	今後、児童数が増加する中、自転車のルールのさらなる指導が必要。 不審な人物の介入を防ぐ点からも「あいさつ」取組は引き続き継続されることを期待する。 ・防災訓練を小中連携で行っていく必要があるのではないか。 ・地域と一緒になって防災教育を進めていく必要があるのではないか。 ・「自分の命は自分で守る」意識の醸成

学校関係者評価総括

「勝手に研究授業」などの取組により教師の学び合いの風土が醸成されている。あいさつができる児童や思いやりのある児童も増えたように見受けられる。学校教育目標研修会に学校運営協議会の委員も参加し、教職員と活発な意見交流ができたことは、大きな成果である。学校・家庭・地域が「みなみっ子のため」の考のもと、それぞれが活発に活動し、その上で三者が上手くかみ合っている状態にある。今後取り組むべき課題は様々あるものの、学校を取り巻く環境をうまく活用して向上していくことを望む。「地域の支援を受ける学校」から「地域の人を取り込んだ学校経営をする学校」へと今年度は一歩踏み出したと思われる。「地域とともにある学校」へと今度も進むことを期待する。

次年度に向けた重点的な改善点

「みんな　みなみの子」を合い言葉に、学校・家庭・地域が一体となり、社会総がかりでみなみっ子の健全育成に取り組んでいく。幼・小・中の縦の連携を具体的な取組（基本的な生活習慣（特にあいさつ・睡眠教育）や学習カリキュラム、防災教育など）の中で強化していく。「つながり」についての研究をさらに推進し、つながりの中で、「失敗を恐れず、夢や目標を持って挑戦するたくましいみなみっ子を育成するカリキュラムマネジメントを実践していく。道徳や人権同和教育のカリキュラムを見直し、いじめや差別意識のなくす取組をさらに強化する。
多様化する教育課題に対応するため、校内研究・研修をさらに充実させ、人材育成の観点を重視して、学校組織の強化を推進していく。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った